別紙

平成２４年度　森プロ事業実績：円原森プロ

（平成24年3月末現在）

		H21～23年度		H24年度				5カ年
		計画	実績	計画	実績	達成率	備考	計画
集約化(ha)		400	300	25	0	0%		400
作業道（m）		7,200	1,909	3,000	0	0%		12,700
間伐等	面積（ha）	104	65	32	6	19%	利用＋切捨	202
	材積（m3）	6,200	1,222	1,360	251	18%	支障木含む	12,500
備考								

21年度利用間伐等における所有者への還元額（補助金含む）　（AVG）4,602円／m3
22年度利用間伐等における所有者への還元額（補助金含む）　1,500円／m3
23年度利用間伐等における所有者への還元額（補助金含む）　1,000円／m3
24年度利用間伐等における所有者への還元額（補助金含む）　1,000円／m3（予定）

施業集約化の状況
- 森林組合と㈱遠藤造林が協力して、地元精通者の協力を得ながら森林所有者へ説明を行い、施業集約化を進めている。

施業プランの活用状況
- 精算時に施業プランの書式を用いて、森林所有者へ説明及び精算を行った。

施業プランナーの養成状況
- 施業プランナー：4名（H19全森連研修：1名、H20県研修：1名、H22県研修：1名、H23県研修：1名、H24県研修2名）

作業道の状況
- 急傾斜地や崩壊地、谷川沿いなど災害発生の恐れのある危険地帯は避けて、できるだけ等高線に沿った平面線形とする。
- 地形や地質、利用目的等に応じた幅員とする。
  （基本は3．0m、機械の作業ポイントは3．6m）
- 各林分の資源状況を把握し、木材生産に関して費用対効果の高い線形とする。
- 片切片盛を原則とし、掘削した土砂は盛土部に利用し土工量の均衡に努め、残土の発生を抑制。残土は災害の恐れのない場所に土捨場を設け、適切に処理。
- 盛土の土羽尻の崩壊を防ぐため、林内に残置された枝条を除去。
- 礫を沢山含む土質では路肩部分が沈下しないよう、横断勾配を水平に仕上げるよう施工。
- 排水処理を徹底して行い、壊れにくい道を作る。（流末部分での洗掘防止）
- 急傾斜地では丸太組工等で切土法面が少なくなるように施工。

作業道の開設状況

作業システムの状況

・基本は車両系システムとし、作業道から遠い林分は架線系システムで木材生産を行う。

＜車両系システム（メインシステム）＞
チェーンソー（伐倒・造材） → グラップル（積込） →8tトラック（運搬）
＜架線系システム＞
チェーンソー（伐倒） → スイングヤーダ（集材） → チェーンソー（造材） → グラップル（積込）

・施業地付近に中間土場を設置し、4tトラックで小運搬した木材を中間土場で仕分けし、8t車にて市場もしくはパルプ工場へ運搬する方法に変更。
・県森連等との連絡を密に取り、製材工場等のニーズに応じた造材、選別を行う。
・一部小規模皆伐を行い、更新を図る。

高性能林業機械の作業状況

中間土場にて積み込み作業

その他

・プロジェクトの進捗状況や問題点等を定期的に話し合う「円原森林づくりプロジェクト運営委員会」及びJV幹部による打ち合わせ会議等を開催。
・担当レベルによる打ち合わせ、現地調査は随時開催。
・担当レベルによる現地研修会を開催。
・総会資料等へ掲載し、森林組合員をはじめ一般市民へ健全で豊かな森林づくりのPRを行った。

森プロの成果

・㈱遠藤造林は作業道の開設技術の向上、森林組合は作業道の設計監理技術が向上した。
・作業道開設により森林所有者の自己山林への意識の高揚を図った。
・作業の効率性ばかりに目を奪われず、間伐による下層植生の回復、雪害木等の除去、必要に応じて植栽をするなど、森林を守るための間伐に取り組む。
・21～24年度事業の精算により、森林所有者へ利益の還元を行い、森林所有者の林業意欲の喚起を図った。

今後の課題

・事業計画書に基づき、作業道の計画的な開設及び素材生産量の増大に努める。
・24年度事業も早期に精算を行い、森林所有者の林業意欲を喚起する。
・県森連と密に連絡をとり、有利な販売先情報を入手する。